説教20220130ミカ6：1-8マタイ5：1-12「大きな報い」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

神の愛は無償の愛で、無条件の愛である、という説教を皆さん何度も耳にしたことがおありになるのではないでしょうか。神の愛は無償の愛、無条件の愛、このように語る説教はインターネット上にも溢れています。私も、そのように黙想して説教を考えてみましたが、妙に先に進んでいかないのです。そのわけを考えてみますと、そのわけは意外に簡単でした。それは、聖書にはそのようには書かれていない、という事です。聖書に無償の愛、無条件の愛が語られていないというのではありません。しかし、神からの愛が無償であり無条件であるという風には、語られていないのです。では、どういう様に語られているかと言いますと、代表的なところでは、マタイ福音書5章 38節～「あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。」

　これは無条件の愛を語っていますね。そしてヨハネの手紙一3章 16節～

「イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。そのことによって、わたしたちは愛を知りました。だから、わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきです。世の富を持ちながら、兄弟が必要な物に事欠くのを見て同情しない者があれば、どうして神の愛がそのような者の内にとどまるでしょう。」

　こちらは、無償の愛を語っています。つまり聖書が無条件の愛、無償の愛について語るのは、総じて、私たち人間が隣人や神様を愛する時には、無条件、無償の愛でもって愛しなさいと勧告なのです。つまり、聖書は、神からの愛が無条件、無償であることを説くというよりは、もっと、私たちの身につまされる、私たちが無条件、無償の愛を与えなさい、というお勧めが説かれているのです。そうなると、無条件、無償の愛も、ただその言葉の心地よさに酔いしれているだけではなくなりますね、もっと、激しく、動きに満ちて、その愛を行っていきたいという思いに駆られるのではないでしょうか。事実、イエス様は御言葉によって、私たちが隣人愛、神への愛を高め、深めることを企図されておられます。今日の説教でイエス様のその思いをどれくらい伝えられるかわかりませんが、とにかく語って参りたいと思います。

さて、今日の説教題、「大きな報い」は、マタイ福音書５章12節から取られています。「喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。」最後のキリストの日に私たちに与えられる、喜ぶべき大きな報い。それは何でしょうか、それは私たちがキリストに出会う永遠の祝福であり、永遠の平和であり、永遠の正しさであります。その時に、私たちは神の愛が無条件であり無償であることをはっきりと知ることができるのでしょう。その時には私たちは神の愛に完全にとどまることになり、神と私との関係は完成されるのです。私たちの神への愛も形定まり、動きを留め、移ろいを鎮めることでしょう。まるで、ラブロマンスの映画のラストシーンが固まって動かなるように。しかし、その最後の日までは、私たちの神への愛そして隣人愛は、多くの試練や葛藤を経ながら動かされ、そうして少しづつでも神からの愛に応えられるように、神の愛にふさわしい姿へと変えられていかねばなりません。なぜならば、愛の本質は、応答することにあるからです。ただ神様からの無償の愛を語ってそれに酔っているだけでは、どうしても、私たちの神に対する応答としての愛は弱くなってしまうことでしょう。今日のミカ書の最後、８節には、「人よ、何が善であり／主が何をお前に求めておられるかは／お前に告げられている。正義を行い、慈しみを愛し／へりくだって神と共に歩むこと、これである。」と記されていますが、この神と共に歩む、という事は、神と応答しながら、語り合いながら、私たちが歩みを進めていくという事にほかなりません。

かといって私たちは、神様に何かお応えしていかないといけないのか、と言って恐縮してしまう必要はありません。それでは、焼き尽くす献げ物として当歳の子牛をもって主なる神をなだめ続けた旧約の民のようになってしまうでしょう。私たちがイエス様の愛にお応えするのは、ただ、イエス様の方に向き直り、イエス様の方に向かっていることだけです。イエス様を信じて従うと言ってもよいでしょう。　　例えば、この世で無償の愛を赤ちゃんに与え続けていた親が、或る時、その赤ちゃんからほほえみやしぐさでもって、愛を返された時に、この上ない喜びを感じないでしょうか。それと同じようにイエス様は、共に歩む私たちの、子どものような愛の応答を喜ばれる方なのです。

今日のマタイ福音書のいわゆる山上の説教は、私たちがその応答する愛を深めるためにイエス様が与えられた御言葉です。イエス様は、度々、折に触れてこの山上の説教を弟子たちに語られたのです。私たちも、イエス様と歩む日々の歩みの中で、繰り返しこの御言葉を聞いていきたいと思います。

さて「大きな報い」として神の無償の愛が与えられる、というのはなんだか矛盾のようにも聞こえますが、とにかく、報いとしての愛を語ることは、無償の愛を知らない私たち人間にとっては大変有意義なことであります。　　　報い、というのは一歩間違うと怖いことになる言葉です。脅すわけではありませんが、聖書には「不義を行う者は、不義にふさわしい報いを受けます」と記されていますし、又、ぶどう園の主人は『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい』と言いました。このように、報いというのは喜びにもなれば悲しみにもなり、又この世の賃金のようにもなるのです。つまり山上の説教の８節の御言葉で語られている通りなのです。「心の清い人々は、幸いである、／その人たちは神を見る。」という事です。私たちは、イエス様との応答から外れる時、清く無い報いを目指すようになり、得られる報いも清く無くなり、そして喜びも失われていくのです。逆に、私たちは山上の説教の御言葉と共に最後まで応答して歩み続ければ、間違いなく最後には大いなる喜びの報いへと入れられるのです。

山上の説教の一番目は「心の貧しい人は、幸いである」です。このイエス様の御言葉を深く味わうには、詩編９編からに記された貧しい人について黙想するとよいでしょう。私もこのことを木曜祈祷会の祈祷会の中で知りましたので、是非、祈祷会のレジュメを読み返して頂きたいと思います。

貧しい人、というのは単に、お金持ちの反対語としての貧乏な人という意味ではありません。それは、人に搾取され奪われて、暴力によってモノだけではなく愛も奪われて、苦しんでいる人のことであります。新しい聖書では、この貧しい人は、苦しむ人と訳されています。貧しい人苦しむ人は、どういう状況にあるか、詩編には、「悪しきものは、高ぶり、苦しむ人を追い回している。」（10：2）と記されています。この有様は、貧しい人苦しむ人が、悪しき人から追い回され暴力的な応答を強いられていることを物語っています。悲しいことに、このような暴力的な応答に慣らされてしまうと、貧しい人苦しむ人自身も、又悪しき者の一人になってしまって、同じことをする側になってしまうのです。そのようないわば負の連鎖が、今のこの世でもいたるところで起っているのではないでしょうか。

詩編によりますとダビデ王自身もその貧しい人苦しむ人の一人でありました。しかし、主と共に歩むダビデは、主が次のように言われるのを聞くことが出来ました。「げに苦しむ者と／いている貧しい者のために／今、わたしは立ち上がり／彼らがあえぎ望む救いを与えよう。」（12：6）

イエス様の「心の貧しい人は、幸いである、天の国はその人達のものである」という御言葉は、この主の言葉の実現と言っていいでしょう。今、私は立ち上がり、というのはイエス様が今、ここに居られて、御言葉を私たちにお与えになっているという事です。イエス様は、貧しい人苦しむ人であるあなたたちこそ、幸せ者である、と宣言されます。私たちはその恵みの御言葉にどう応えるでしょうか。この御言葉を心底味わえる時、私たちは、今まで、私を搾取しいじめて来た人々のことなんかすっかり忘れ去るのではないでしょうか。イエス様の企図されるところはそこにあります。私たちが、私たちを追い回している悪しき者のことなんかほっておいて、イエス様の御言葉に聞き、応答していく者へと生まれ変わらせるために、イエス様はこの御言葉を私たちに聞かせてくださるのです。

それから、山上の説教は具体的に私たちの状況を挙げて、語られていきます。悲しむ人、柔和な人、義に飢え渇く人、という様に聞いていきますと、だんだんと、イエス様と私の応答が深まっていき、愛の関係性が深まっていくさまが感ぜられるでしょう。このようにしてイエス様と共に歩む私たちは、その都度、喜びを味わう者とされているのです。そして次の「憐み深い人」「心の清い人」「平和を実現する人」という段になってきますと、ますますその神への愛、隣人愛が強められて、積極的に行っていく愛が語られていきます。もはや私は貧しい人苦しむ人ではなくなり、神の前に豊かにされ、平和を実現する愛を行うこともできるようにされたのです。これが幸いでなくしてなんでしょう。

でも、それからが本当の試練の時であるとイエス様は言われます。「平和を実現する人」の次は「義の為に迫害される人」であります。ここに来て私はまた、最初の、貧しい人苦しむ人のようにされるのです。

イエス様が、この山上の説教の説教を繰り返し弟子たちに聞かされたわけは、ここら辺にあるでしょう。つまり、私たちはこの世にある限り、この山上の説教の順序でイエス様と応答し、その関係性を深めていくのですが、平和を実現したと思ったら、又貧しい人苦しむ人のようになっていたという事の繰り返しという事です。私たちはこの成り行きをイエス様がいなければ、やれやれやってられないと言って放り出してしまうかもしれません。しかし、この御言葉を語っておられるのは他ならぬイエス様御自身なのです。だから、私たちはどんな迫害の状況に連れ戻されたとしても、イエス様の御言葉のゆえに、幸いでいられるのです。

どうか、私たちは、どんな苦しい状況にありましてもイエス様から離れていかないように、祈って参りましょう。私たちは、悪しき人たちが目の前に差し出す、報酬としてのニンジンを追いかけてはいけないのです。イエス様は、喜びなさい、喜びなさい、天には大きな報いがある、と言われています。私たちは何時もイエス様と語り合い、この最後の時に与えられる無償の神の愛の方を、常に選び続けて参りたいと願います。

祈ります

天の

今、私たちは職場にあって、施設にあって、学校にあって、又、家庭にあっても、貧しく苦しむものとされています。どうかそんな私たちを御言葉によって常に祝福し、励まし、導いて下さい。あなたが与えて下さった御子と、私たちがへりくだって共に歩んでいくことが出来ますように。

あなたの愛の広さ、長さ、高さ、深さは、私たちの思いをはるかに超え、はかり知ることが出来ません。どうか私たちが、あなたのその大きな愛に向き直り、少しでも近づくことが出来ますよう、私たちの愛する心を養ってください。

今日は、山上の説教を聞くことが出来、感謝します。これらの説教により、あなたは私たちがどんな困難な時でも、あなたの御言葉によって幸いであることを宣言してくださいました。これらの説教が常に私たちの心に宿され、常にあなたを褒めたたえていることが出来ますように。